



宮城学院女子大学

プロジェクト型自主活動

住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラム2013

∞ 宮城学院女子大生による
子どもの「日常」再生ネットワーク ∞
活動報告2013



— Contents —

■ 宮城学院女子大生による子どもの「日常」再生ネットワーク …… 1

■ 2013年度の活動

1. 仙台市立南光台小学校 学習支援 …… 3

2. 小学生のためのサマーカレッジ2013 …… 4

3. 石巻市立大原小学校 学習支援 …… 8

4. 岩沼南児童館 こども支援 …… 12

5. りんごプロジェクト …… 13

6. その他の子ども支援活動 …… 15

7. LACを卒業する私からのメッセージ …… 16

＊宮城学院女子大学の災害復興支援活動

発災から丸三年が経った2014年3月11日、久しぶりに津波被災地の話題が、テレビニュースや新聞で大きく取り上げられました。こうした「記念日」でもない限り、もはや震災の話題はニュースバリューがないのかもしれませんが。被災地への社会的関心は薄らいでおり、世間における被災者支援やボランティア活動の機運も、かつての熱気を失いつつあるのが、現実です。

しかし、世間の関心が薄れたからといって、被災者にとって長く厳しい日々が続く現実が、変わるわけではありません。災害復興ボランティアの真価は、むしろこれから、被災地への着目が薄れ、支援が手薄になっていく今後こそ、あるのではないのでしょうか。私たちは、被災地に近い仙台にある大学として、今後も復興ボランティアの活動を絶やさずに継続していくことを、重要な使命だと考えています。

阪神淡路大震災をはじめとする過去の災害の例をみても、発災から5年、10年という時を経るなかで、災害復興ボランティアの活動を質量ともに縮小させずに継続することは、決して簡単なことではありません。そこで私たちは、逆説的かもしれませんが、「災害復興」や「被災者支援」という枠組みに囚われすぎないことこそが、災害復興ボランティアを長期的に続けるためには必要なのではないかと、考えます。緊急対応期における非日常的な活動として災害復興ボランティアを、復興期における日常的な活動へとだんだん移行しつつ、無理なく継続していくことが大切なのではないのでしょうか。もちろん、その理念を実行するのは、容易ではありません。緊急対応期の後、長く緩やかに続く地域復興の過程を通して、地道な支援活動を先細りさせることなく継続するにはどうすればいいのか、宮城学院全体で考え、精一杯取り組んでいきます。

＊子ども支援プロジェクト

2014年現在、かつてのように瓦礫片付けなどへの人手が必要とされていた状況から、被災者の皆さんの生活再建をサポートするための多様で複雑なニーズに応えるフェーズへと、ボランティアの形も移行しています。宮城学院女子大学では、学生たちが一時の盛り上がりにならずに長期継続できる取り組みとして、総合的な子ども支援活動を展開しています。

震災直後には我慢強い「よい子」でいた宮城の子どもたちが、時間の経過に伴って、内在化させていた深刻なストレスを表出し始めています。不安や悲しみ、心的外傷を抱えながらも、多くの子どもたちはそれを言語化できず、SOSを出すのは氷山の一角にすぎません。また津波被災地では、発災から三年が経った今でも、教員たちは多忙を極め、保護者も生活の再建に追われて、時間をかけた丁寧な子どものケアができているとは言い難い状況にあります。本活動は、そのような事態の打開を目指す、宮城学院女子大学の学生による継続的な子ども支援の試みです。単発的な学習補助や遊び機会の提供にとどまらず、「学び」「遊び」「食」を総合したアプローチにより、被災児童が「3.11」以降に失った「日常」を再生する一助となるべく、尽力したいと考えています。

発災直後は個別に展開していた、学校常駐型の学習補助、炊き出し活動、音楽による慰問、遊び支援などを統合して、各部門が連携した総合的な子どもケアに昇華します。2012年度と13年度は、住友商事による「東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」活動・研究助成をいただき、本学卒業生のネットワークがある県内沿岸部の被災校に、活動を広げました。

*MG子ども支援の理念

本活動がめざすところは、以下の三点に集約されます。

①総合性：異常事態への対応よりむしろ、発達の保障を前提とした心地よい「日常」の再生という視点から、子どもの生活に多面的に関与する。具体的には、学び（学習支援や英語活動）、遊び（音楽や表現など）、食（上質な食事の提供）のジャンルで連携してボランティアを展開し、子どもたちとの個別対話を通じて、各自異なる発達課題に応じた生活リズムを作り上げる手助けをする。

②継続性：不安や心的外傷を抱える子どもたちに必要な、上下関係が確立した相手である教員以外の、共感的な「安心できる他者」を確保する。単発的な慰問活動ではなく、メンバーがシフトを組んで学校に常駐する。小さなつぶやきにも耳を傾け、モヤモヤした気持ちを言語化するプロセスに寄り添う「年上の友だち（仲間）」として、子どもの生活に溶け込む。

③重層性：激務と責任の重さに疲弊する教員をも併せてサポートする（特に新任や経験の浅い教員の負担を一部分け持つ）。とりわけ、学校も家庭も十分なケアがしづらい、身体的ハンディ・発達上の問題・近親者の喪失などにより心理的な脆弱性を抱えた子どもたちへの、授業内外の時間をできるだけ長く共有する個別対応を、多忙な教員・保護者に代わって行う。

本活動は、「被災者支援」という枠組みに囚われず、被災時から平時へとまたがる長期的な活動ネットワークを確立することで、子どもたちの「日常」を再生し、生活の質を高めていきます。その取り組みを通じて、専門性が高くない学生主体のプロジェクトとして実効性を持ちうる、地元学生だからこそ可能な（単発の慰問ではない）、総合的・継続的・重層的なサポートのノウハウを蓄積し、ゆくゆくは災害後の子ども支援一般に応用可能なプログラムへと整理して、被災各地に提案したいと考えています。

東日本大震災で大きな被害を被った地域は、津波の襲来を受けた沿岸域に限っても、青森県から福島県まで、長大な範囲にわたります。残念ながら、その全域において子どもたちへの支援がまんべんなく行き届いているとは、とても言えない現状があります。

2014年2月28日のNHKニュースでは、被災地の子どもたちが置かれた厳しい状況、そして支援をめぐる格差が拡大している実態が、報じられました。

適切なケアを受けられず心理的な傷を抱えたまま自暴自棄になったり、不登校になったりしている子どもがいることや、家庭の経済状況を察して高校進学をあきらめ働く子どもがいることなどが報告され、支援が届いている場合とそうでない場合とで格差が広がっているという声が、相次ぎました。

児童福祉が専門でネットワークの事務局長を務める東洋大学の森田明美教授は「3年たって、むしろ格差が広がり始めている。子どもの思いを引き出すことのできる人材を養成し、徹底して寄り添う取り組みが緊急に必要だ」と話しています。

宮城学院女子大学の子ども支援プロジェクトは、どこか遠くから訪れては去っていく単発型の支援ではなく、「いつもの、普通のこと」として子どもたちに寄り添い続けることを、第一の基盤と心がけて活動に取り組みます。子どもたちの豊かで安定した「日常」を取り戻すために、ささやかであっても活動を途切れさせることなく続けることが、私たちに出来る最大の貢献だと考えています。



仙台市立南光台小での学習支援活動は、震災直後より開始し、今年で3年目となります。地盤沈下や地滑りなどで被害を受けた校舎は震災後使用できなくなり、現在子どもたちは校庭に建てられた仮設のプレハブ校舎で学校生活を送っています。校庭が狭くなった分遊ぶ場所も少なくなり、学年ごとに校庭が使用できる日とできない日が決まっています。

小学校生活に不慣れな1年生へのフォローを中心に、今年度はこれまでの授業補助や学校生活サポートに加え、校外学習の引率や発達障害を抱えた子どもへの支援、担任不在時の対応などより幅広くたくさんの方を任せてもらっています。

2013年4月～2014年3月まで、延べ89名の学生が参加しました。

*仙台市立南光台小学校 活動報告

食品栄養学科4年 相澤恵美

「この仮設校舎がなければ、もっと広く走り回れるのに」子どもたちはたまにつぶやきます。プレハブ校舎建設で校庭が狭くなった分、遊ぶ場所が少なくなりました。どんなに天気がよく、走りまわたくても、我慢しなければならない時があります。そんな時に、子どもたちの相手となり、遊びを提供していくのも私達の役目です。自分が養護教諭の勉強をしていることから、その専門性を活かし、子どもたちの心のケアも行っています。子どもたちの中には石巻で被災した子どももいます。心が不安定になっているときは子どものそばにいて、何気ない会話をし、子どもの話を聞きます。少しでも子どもの不安がなくなるようにケアを行っています。私たち大人が怖いと経験した東日本大震災。それを子どもたちは、私たちよりも低い年齢で経験しています。私達が思っているよりも、子どもたちは怖かったと思いますし、忘れたくても忘れられないものであると思います。



2月19日に大学内で開催されたミャンマー大学生との交流会で、私は南光台小学校の震災当時から現在までのお話をさせていただきました。ミャンマーの学生の皆さんは、私の話をうなずきながら熱心に聞いてくれ、震災や震災後の活動について人に伝えることの大切さを改めて感じました。

約2年間このボランティアに携わりましたが、南光台小での経験は私をとっても大きくしてくれました。この小学校で過ごせたこと、私を受け入れ、仲間にしてくれた子どもたち、活動を温かく支えて下さった先生方に心から感謝しています。



2. 小学生のためのサマーカレッジ 2013

「小学生のためのサマーカレッジ2013」は、子どもたちに大学ならではの学びと遊びを体験してもらう総合型のイベントです。3回目の今年は8月2日と3日の2日間で開催され、仙台市内の被災した子どもたちを含めた62名を招待しました。

今年は特別講師に 宮元三恵先生（東京工科大学准教授）をお迎えし、「森の不思議な住人になる」をテーマに、表現活動のワークショップを行いました。本学キャンパス内の自然の遊歩道をみんなで歩き、木の葉や花、様々な材料を自由に使って自分のイメージする森のはてなを表現しようという試みです。前日まで降り続いた雨のため、遊歩道の散策ルート・材料集めなど最後の最後まで悩まされましたが、当日は夏らしい日差しが射込みました。様々な材料を用いて表現された子どもたちそれぞれの“不思議”や“きれい”。芝生の上や思い思いの場所で森の住人になりきりました。



2日目午後の講座の時間では、本学の教授陣が各自の専門性を生かした小学生のための体験型講座を開講しました。子どもたちは科学、生物、歴史、調理、英語等のなかから、興味に沿った講座を自ら選び参加し、講義室や芝生、調理室と様々な場所で「学ぶ」という遊びを楽しみました。

ランチの時間には「森のレストラン」がオープンし、音楽科の学生による弦楽四重奏をBGMに3色パスタや手作りハンバーガーを皆でほおばりました。手作りのおやつも大好評で、みんなあっという

間に平らげてしまいました。食品栄養学科の学生が中心となりメニューを考え、忘れられない特別感を出すために試行錯誤しました。



昼休みの一番人気は毎年恒例のイカダ遊びです。昼食後ダッシュで乗り場に向かう子どももいました。他にもサッカー、竹馬、お手玉など学生・教職員も一緒になって遊び回りました。



そしてサマーカレッジの最後は礼拝堂での修了証書授与式です。厳かな雰囲気の中一人一人の写真の入った修了証書を校長先生から受け取ります。宮城学院高等学校3年の石塚麻有さんが演奏するパイプオルガンの音色に真剣に聴き入る子どもたちの姿が、外で元気に遊び回る姿とは対照的で、とても印象的でした。



このイベントでは、子どもたちに心の底から楽しめる特別な1日過ごしてもらいたいという思いから、「学び」「遊び」「食」「音楽」を融合させた総合的なカリキュラムを提供しています。その中で子どもたちの特性や可能性を伸ばしていくサポートを行い、そして子どもたちが子どもたちらしく過ごせる「日常」の回復の一助になりたいという希望があります。もちろん参加する大学生にとっても、「学び」とは何か、子どもの成長に寄り添うとはどのようなことなのかを肌で感じとることのできる貴重な機会となっています。

今年度は学生による「小学生のためのサマーカレッジ2013」実行委員会が1月より発足し、78名の学生が担当別にチームを組み、企画の立案や教材・必要物資の準備、当日の運営を担当しました。さらに子どもへの教育的な働きかけを含めたプロジェクト運営のワークショップも計3回開催し、サマーカレッジ実現に主体的に取り組みました。

*サマーカレッジ 活動報告 (1)

児童教育学科2年 高橋玲菜

私はサマーカレッジに遊歩道係として参加しました。サマーカレッジのメインイベントとしての表現講座に遊歩道散策は大きな意味を持つため、何度も何度も遊歩道を歩き、どのような声掛けをしたら自然を通し子どもたちの気付きや疑問を深めることができるのか考えました。今までは何となく自然を見ていたのですが、子どもたちに色々なことに気づいてほしいと思い注意深く接していると、暖かさ・風の音・光など視点を変えることができました。このことをサマーカレッジに参加するボランティア大学生に伝えるため、子どもの疑問・発問を深めるためのプリントを作成しました。

サマーカレッジ当日は、続いた雨により地面がぬかるみ滑りやすい状態だったので、子どもに怪我がないように注意を払いながら遊歩道を歩きました。



私はこの遊歩道散策を通して2つのことを感じました。

1つ目は子どもたちの気づきの深さです。私たちは、子どもたちが様々なことに気付いて疑問を深められるように、光・太陽・虫・植物・風・空気・水などを「見る」「聞く」「触る」「感じる」「嗅ぐ」の観点に注意し、声掛けをしていきました。そのかいもあり、子どもたちは様々な音の存在や空気の変化などに気づいていました。特に虫探しには熱心で、「どんな所に隠れているかな」「なんの虫だろう」など、いる場所、名前、またどのような虫なのか

疑問を持ち考えている姿がみられました。子どもたちは私たちの予想通りに反応したかと思えば私たちでは気づかないことに気づき、そして疑問に思う様子もあり、サポートする私たち学生自身が新たな発見をすることもありました。

2つ目は自分たちで限界を作らないということです。ギリギリまで遊歩道の途中にある小川を子どもたちに渡ってもらうか悩みました。正直なところ渡るの難しいし、子どもたち自身も拒否するだろうと思っていました。しかし当日、子どもたちはみんな楽しそうに川を跳び、水の中に入り楽しんでいました。私たちが勝手に「子どもには出来ないだろう」と決めつけることは、子どもたちの経験の機会を減らしてしまう可能性があることを実感しました。



あっという間に2日間が終わりました。参加して本当に良かったという思いです。準備の段階で何度も遊歩道を歩き、声掛けについて考え、危険な箇所はないかを確認し、限りある時間の中ですべて大変でした。声掛けのプリントを作成しているときにはどうしたらよいのかわからず投げ出したくなりました。しかし、最後までやりきり、子どもたちの楽しそうな様子を見て、「楽しかった、また来年も来たい!」という言葉をもらい、嬉しさがこみ上げました。

サマーカレッジの活動は私たち自分自身の成長につながる取り組みでもあると思います。私は、将来は小学校の先生になりたいと改めて思うようになりました。



震災後3年経ちますが、遊ぶ場所、学校、住む家などいまだに震災前の状況に戻れていない子どもたちもいます。大学の広いキャンパスで元気に走り回る様子を見て、子どもらしく笑ったり、はしゃいだり、興味のおもむくままに学んだりすることが子どもにとっての一番の癒しであり、求められていることなのだと感じました。来年も必ず参加し、子どもたちと楽しみながらサポートをしていきたいです。



＊サマーカレッジ 活動報告 (2)

児童教育学科4年 大場みどり

「子どもたちと一緒に遊べて楽しそう」ボランティア募集の話にそう思ったことをきっかけに、私は第1回目の開催から継続して3年間「小学生のためのサマーカレッジ」に携わってきました。第1回目では、初対面の子どもたちとすぐに打ち解けることができるだろうか、子どもたちの前で大学生のボランティアとしてしっかり活動できるだろうか、ドキドキした気持ちでいっぱいでした。しかし4年生やOGの先輩方の動きや子どもたちとの関わり方を見様見真似で実践しながら、楽しく参加することができました。

第3回目となる今回は遊歩道散策係のリーダーとして活動に参加し、新しい遊歩道散策ルートの開拓を試みました。何度も打合せや下見を重ね、当日はケガや事故もなく子どもたちにも「楽しかった」と言ってもらえる遊歩道散策をすることができました。これは、一人ひとりの力が集結し、ひとつになって実った結果だと思います。



サマーカレッジを運営していくなかでは、立場や考え方の異なる仲間との関わりが刺激となり、新しい発想が生まれることもあれば、逆にぶつかり合うこともありました。これまで私は「協力し合う」ということは、単に一人ひとりが力を出し合うことだと思っていましたが、そうではなく、違いや衝突を乗り越えてひとつの大きな力にしていくことが「協力し合う」ということなのだ実感しました。そのために、第1回目のように「楽しかった」だ

けでは終わることができなかった第3回目ですが、障害を乗り越え、苦勞しながら一つのを創り上げたことで、充実感と達成感で胸がいっぱいになりました。



サマーカレッジやボランティアなどの自主活動は、自分自身を見つめなおし、成長させてくれるとても貴重なものだと思います。しかし、後輩のみなさんには、自分ではない他の「誰か」のために行うものだという心にとめ、その「誰か」にとっての最善を目指して活動してほしいと思います。



3. 石巻市立大原小学校 学習支援

牡鹿半島の海沿いにある大原小学校への支援を開始して2年目となります。この学校がある大原浜一帯は、津波によって壊滅的な打撃を受け、高台に建っていた小学校のみが、流されずに残ったのです。かつて大原浜に住んでいた方々は、遠く離れた仮設住宅での生活を余儀なくされました。被災後3年が経過する今でも、児童の半数が4つの仮設住宅からバス通学をしています。

この学校は、石巻市街などに比べて、交通の便が良いとは決して言えず、継続的な支援が受けづらい状況にあります。同じ宮城県内にいる私たち宮城学院女子大学の学生達だからこそ継続する意味があると考え、活動してきました。片道約3時間の道のりを公共交通機関やレンタカーを活用し、宿泊をしながら、時には何日間か連続で活動に参加します。

現在の大原小の児童数は25名で4クラス、3・4年生と5・6年生が複式で授業を受けています。日常支援として、授業中の補助、休み時間・放課後の遊び、給食時の配膳準備、掃除など、多岐にわたる内容で、学生がサポートを実施しています。また、学科の特色を活かしたイベント型支援として、ウィンターカレッジや弦楽器の出張授業などを企画し、総合的な支援を続けています

2013年4月から2014年3月まで延べ96名の学生が学習支援活動等に参加しました。

*大原小学校 学習支援 活動報告

食品栄養学科3年 中村彩香

昨年度に引き続き、今年度も大原小学校への学習支援ボランティアに通っています。私は大学2年生から活動しているので、今年でようやく2年目になります。大学の講義の都合のために1年間で行ける日数は限られており、子どもたちに顔と名前を覚えてもらうには時間がかかりました。



私たちが大原小学校に継続して行くようにしているのには理由があります。土日などの休日にイベント開催としてボランティアに行くのも一つですが、その支援では子どもたちの休みが減り、さらには、震災があったということをそのイベントの度に思い出してしまうのです。そこで私たちは平日の学校に学習支援という形で行き、震災前の生活に戻れるよう、日常生活での勉強面や心理的な面のサポートを実施しています。こうして継続して通うことで、子どもたちや先生方と信頼関係が築け、その発展した形として年に1回はウィンターカレッジなどの特別なイベントを開くことができます。



震災からもうすぐ3年が経ちます。子どもたちはとても元気で可愛らしく、あの震災の被害を受けたことを忘れてしまうくらいです。しかし、たまに起こる小さな地震に、泣き出してしまう子、強がりながらも怯える子もおり、机の下にもぐるのが本当に早いのです。さらに、肥満傾向の子や3年間で急激に顔や体が丸くなった子もいます。その背景

にはやはり震災があると思います。仮設住宅に住み、学校が終わるとすぐ送迎バスで帰らなければならないのに、帰ると体を動かして遊ぶ場所がないのです。そのため私たちは、休み時間と帰りのバスの時間まで、たくさん子どもたちと走り回って遊んでいます。

この子どもたちの素敵な笑顔を絶やさないために、来年度も引き続き通い、学生ボランティアの数を増やして、子どもたちのサポートをしていきたいです。

＊大原小学校 ウィンターカレッジ 活動報告(1)

発達臨床学科3年 坂井美樹

12月24日クリスマスイブの日に、食品栄養学科、音楽科、発達臨床学科の学生で、大原小出張イベントとしてウィンターカレッジを開催しました。サマーカレッジには種々の事情で参加できなかった大原の子どもたちに、冬の楽しい一日をプレゼントすることが目的です。



当日のプログラムは、大きく分けて表現の時間と食事の時間があり、私は表現の係になりました。その内容は冬をモチーフとしたオブジェ作りです。最初にみんなで材料を外に探しにいきました。大きな木の枝や貝殻を見つけて「ほら、こんなに拾ったよ!」と見せてくる子どもたちの表情は生き生きとしていて、私も嬉しくなりました。その後の制作活動では、1グループに1人以上学生がついて子どもたちのサポートを行いました。出来上がった作品は、赤い木の実を使ってお正月にも飾

れそうなものや、近くの駐車場で拾った貝殻やしやもじがついているもの、家の形や三角のものなど、1人1人の作品から個性が溢れていてとても素敵でした。午後には、講師の青木先生が全員の作品をみんなの前で紹介し、講評を行いました。自分の作品を皆の前で評価してもらい、恥ずかしがりながらもとても嬉しそうにしている姿が印象的でした。

子どもたちが自由にのびのびと自分の発想を表現している様子は本当に素晴らしく、子どもたちをサポートする仕事の魅力をこの活動を通して改めて強く感じました。また、短い期間の中で試行錯誤を繰り返しながら準備を進めていくことは大変なことでしたが、皆で協力しながら一つのことに向かって妥協しないで活動を進めていくことの楽しさややりがいを学びました。子どもたちの笑顔を見た時のこの感動と達成感はなかなか味わえないと思います。今回ウィンターカレッジに参加できて本当に良かったです。子どもたちがもっと元気に過ごせるように、これからも楽しい機会や良い環境を提供していきたいと感じました。



＊大原小学校 ウィンターカレッジ 活動報告 (2)

音楽科3年 赤間夏海・岩崎日菜子
佐藤美桜里・引地理恵・宮城諒子

大原小学校ウィンターカレッジに音楽科有志5名で参加しました。今回のウィンターカレッジでは、音楽の力を生かし企画をより濃いものにしたと考え、「はじまりの会」と「おわりの会」で小学生と一緒に歌を歌う活動をしました。

「はじまりの会」では、『雪やこんこ』を題材に取り上げ、歌とピアノ、そして管楽器のフルートも入った演奏でした。はじめにフルートとピアノで

『雪やこんこ』を演奏し、曲名あてクイズをしました。フルートの音色に聴き入っている子や、「その曲知っている!!」と答えを早く言いたくてソワソワしている子もいて、皆楽しんでくれました。曲名が分かったところで、大原小学校のみなさんと大学生・先生方全員で歌い、ウィンターカレッジが始まりました。



「おわりの会」では、一味違ったクリスマスを感じてもらえればと思い、シューベルト作曲の『Ave Maria』をソプラノ・ソロで演奏しました。心静かな祈りが込められている歌に、子どもたちは真剣な表情で聴き入っていました。すると…「素敵な歌声が聞こえてきて、つい大原小学校に来てしまったよ」とフランス語しか話せないサンタクロースが登場し、子どもたちにクリスマスプレゼントを渡しました。プレゼントを渡している間に、私たちは『サンタが街にやってくる』・『赤鼻のトナカイ』・『あわてんぼうのサンタクロースを』3曲をバック

ミュージックで演奏しました。

最後には、にぎやかなクリスマスソングの『ジングルベル』を皆で歌いました。小学生数名に鈴を担当してもらい、クリスマスらしさを感じながら元気に締めくくりました。



今回、子どもたちと関わりながら、音楽の良さを生かしてサポートする貴重な体験ができました。一緒に歌ったり演奏したりする中で、子どもたちの表情がキラキラしていたことがとても印象に残っています。限られた時間の中で1～6年生全員が楽しめるプログラムを考えることは難しく、当日まで不安もありました。しかし、表現係の方、食事係の方、先生方からもサポートして頂き、子どもと一緒に楽しみながらプログラムを進めることができました。



＊大原小学校 弦楽器出張授業 活動報告

音楽科3年 佐藤愛美

2月13日、音楽科教授の菊池恭江先生と弦楽四重奏QSPで大原小学校の活動に参加しました。

今回は1・2年生の弦楽器体験の出張授業と、全体の合奏発表会の2つの活動について、子どもたちと皆で楽しめるプログラムを考えました。

この日は老朽化した音楽室の改装の一つとして、学生ボランティアが作成した新しい掲示物のお披露目がありました。また最後の全体合奏の後には、食品栄養学科の学生作成のマフィンとクッキーで、皆でテーブルを囲みお茶会をしました。



4時間目の1、2年生の弦楽体験授業では、教科書にも載っているような曲を多く盛り込んだプログラムにしました。小さなヴァイオリンとチェロの弦楽器体験も行いました。最初は恥ずかしがってなかなか楽器に寄って来なかった子供たちも、実際に自分自身で楽器に触れるうちに積極的になり、しまいには順番待ちの列ができました。子どもたち全員が体験することができ、最後は『かえるの歌』で私たち弦楽四重奏とコラボレーションで演奏もしました。楽器体験する前と後では子供たちの目の輝き方が変わり、音楽の力を感じる事ができました。

全体の合奏発表会では、各学年の子供たちがリコーダーや鍵盤ハーモニカで演奏し、私たち弦楽四重奏がその伴奏をするという形態をとりました。いつもはピアノ伴奏で慣れている子供たちに弦楽器の音を体験してほしいと思い、学年ごとに

選んだ曲を弦楽四重奏用にアレンジし、子供たちと演奏しました。どの学年も私たちの音を聞きながら一緒に音楽を奏でてくれました。



昨年度訪問した時よりも、子どもたちが元気になっていたことが嬉しかったです。震災を忘れることは出来ないけれど、子供たちが笑顔になれる時間が増えるよう、私たちは音楽を通して活動を続けたいと思います。またぜひ訪問して子供たちと一緒に音楽を楽しむ時間を作りたいと思います。



4. 岩沼南児童館 こども支援活動

岩沼市岩沼南児童館でのこども支援活動は2013年9月に発足し、子どもたちの遊びをサポートする活動を展開しています。教育・食の専門性や子ども支援の実績を持つ宮城学院女子大学学生と、様々なボランティア活動の実績のある他大学学生とで連携し、プロジェクトの企画・運営・実施までの一連を学生自身で担っています。岩沼南児童館で活動実績を積んだのち、より被災被害の大きい東児童館など他の児童館へも活動の幅を広げて行く予定です。2013年9月～2014年3月まで、事前の合同打合せを含めて延べ60名の宮城学院女子大学生が活動に参加しました。

＊岩沼南児童館 活動報告

児童教育学科2年 伊藤文佳・中塚悠

私たちは小学校・幼稚園教諭を目指し、大学では子どもについて学んでいます。普段学んでいる知識や、サマーカレッジでの支援経験を生かせると思い、この活動への参加を決意しました。まず児童館の子どもたちについて知りたいとの思いから、比較的被害の少なかった岩沼南児童館での子ども支援をスタートさせました。

初めてのプログラムは12月7日(土)に実施し、就学前の子供から小学校高学年まで、10名の子どもが集まりました。プログラムは、お互いの名前を覚えるためのゲーム、準備体操、しっぽ取りゲーム、じゃんけん列車、手遊び歌、ドッジボールです。特にしっぽ取りゲームはみんな夢中になって走り回っていました。最初はしぶしぶ参加していた男の子が最後には「まだいたい、もう少し遊んでいく」と言ってくれたことがとても嬉しかったです。



課題もいくつかありました。まず提供するプログラムとして、どの学年にも対応できる遊びを考えると、児童館は異なる学年の子どもと一緒に活動する場なので、全ての子どもたちが理解し、楽しめる活動にしなければいけません。事前の計画作りや、臨機応変な対応が求められることを実感しました。また、他大学と連携を取りプロジェクトを企画・運営していくことの難しさも実感しました。今後はお互いの大学で専門的に学んでいることや、ボランティア等の経験を更に生かして、大学間で個性を伸ばしあえる活動にしていくことが目標です。

児童館に何度か訪れ、気づいたことがあります。それは子どもたちが、学校で見るよりもものびのび過ごしているということです。やりたいことや興味・関心を素直に表現しているように感じました。学校とも家とも違うそんな場所だからこそ、子どもたちに心から楽しんでもらえるプログラムを提供したいと感じました。

南児童館での企画内容の改善を繰り返し、活動を充実させることで、今後はより被害が大きかった地域での支援活動につなげていきたいです。

5. りんごプロジェクト

りんごプロジェクトは、被災した地域を再発見することと、プロジェクト型の保育を実現することを目的に、保育所の保育士、本学学生・院生・教員が立ち上げたプロジェクトで、今年で2回目の実施となります。対象は亶理・荒浜保育所の5歳児です。亶理町は、東日本大震災で甚大な津波被害があった地域で、現在も仮設住宅で暮らしている方々が多くいます。亶理町の中でも、荒浜地区や吉田地区の保育所は、仮設施設で保育を行っており、亶理保育所も荒浜保育所の敷地内に仮設園舎があります。

このプロジェクトは、被災した亶理町の復興をサポートするという意味合いも含め、本学の院生を主体とし、他学科にも参加者を募り活動しています。

今年度は3日間計4回のカリキュラムで延べ15名の学生が参加しました。青木一則先生（宮城学院女子大学非常勤講師、2012年度サマーカレッジ特別講師、東北福祉大学子ども科学部准教授）を講師に迎え、実物のりんごに触れ、五感を使って感じたままを表現するという臨床美術の手法で、子どもたちそれぞれが自分だけのりんごを描きました。2014年度以降も、保育所の方々のご協力をいただきながら、より良いものへと活動を継続させていきたいと考えています。



*りんごプロジェクト 活動報告

大学院 健康栄養学研究科 健康栄養学1年
小岩恵子・柴生彩

りんごプロジェクトは、イタリアのレッジョ・エミリアのプロジェクト型保育をヒントとして、「感じる」「学ぶ」「表現する」という3つをプロジェクトの柱とし、亶理町の特産品であるりんごを教材として、子どもの興味関心に寄り添えるようなカリキュラムをデザインしました。

本年度は、11月末から活動を開始し、保育所での実際の活動は12月に入ってから全4回の工程で行いました。プロジェクトの内容として、第1回目は“はてな”探しをキーワードにりんごへの関心を深めていきました。子どもたちから出された“はてな”は「なんでボツボツがあるの?」「なんで赤いりんごなのに黄色いところがあるの?」「なんでべたべたするの?」といったものでした。そして、この出た“はてな”を事前に作成していた木に貼りつけ、みんなで“はてな”の木を創りました。保育士の先生からは「昨年度よりも多くの“はてな”が出されていた」「人のまねをする子が少なかった」という言葉をいただきました。第2回目は“はてな”を抱いた状態でりんご園に行き、りんご狩りやりんご園の方の話を聴きました。りんごのなり方や枝や葉の付き方、育て方など市販のりんごを見ただけではわからないことに子どもたち自身が気づき、新たな“はてな”を見つけることができました。具体的には、りんごを見て、切って、食べていく中で「蜜のところはもっと甘い」「中は星の形」「さくさくする」など、さらなる興味を引き出すことへと繋がったということです。時間内に収まらないほどの“はてな”が生まれ、りんご園の方が驚くほどでした。本物に触れることが、子どもたちの“もっと知りたい”という気持ちやそれを知ろうとする行動力へと繋がったのだと感じました。

第3回と第4回では、講師の先生をお招きし、臨床美術の手法に沿って“私だけの”りんごを描き、大きな紙に貼りつけ、一枚の“みんなの”りんごの絵を完成させました。

そして最後に1人ひとりの絵を全員で鑑賞し、講師の青木先生に講評していただきました。先生には「このりんごは太陽にいっぱい当たった感じが出ていていいね」「重量感があるね」等、「全体」としてと“個”としての両面から位置づけるような講評をいただきました。それを聞いて、子どもたちはとても嬉しそうにしていました。このような経験が、自分の自信に繋がり、他者を認めることにも繋がるのだと感じました。



今回のプロジェクトを通して得たことは、大きく分けて2点あります。

1点目は、子どもたちの発想力や創造力は無限であり、その様も多様であるということです。第1回でりんごの“はてな”探しをしましたが、子どもたちは自分たちの視点でりんごを捉え、大人では気付かないような新たな発想を私たちに示唆してくれました。また、絵を描くという工程では、1人ひとりがそれぞれに感じ取ったりんごを描くことで他にはない“私だけの”りんごを描く様子が見てとれました。

初めは周囲を見ながら描いていた子どもも、次第に目の前にある自分のりんごに集中していき、大きさや色や形などの個性が出せているようでした。それは講師の先生や諸先生方の働きかけ、私たちからの声掛けによって、他者と違っていいのだということに気づいたからであると考えます。

2点目は、りんごの絵の鑑賞を通して、ひとつとして同じりんごはないということに気づき、互いに認め合う姿勢を育むことができたということです。子どもたちが講師の先生からの講評を聴く中で、自己だけではなく他者の描いた絵の独自性や良さというものを感じ取っている様子を、表情や言動から見ることができました。

本プロジェクトは、復興ボランティアという形で始まりましたが、私たちの方が子どもたちから元気をもらうことも多く、毎回活動が楽しみでした。また、保育士の先生からは、本年度の活動は子どもたちが一番楽しみにしているりんご狩りを初回にしたことによって、子どもたちの気持ちが盛り上がった状態でりんご園に行くことができ良かったと言っていました。今年度は2年目の活動でしたが、子どもたちの様子は昨年と同じというわけではなく、気づきや表現の仕方は多様であると再認識しました。今後も保育士の先生と、学生とで十分に検討を重ねたカリキュラムを共に作り上げていきたいと思えます。

6. その他の子ども支援活動

◆虹色のシンフォニー

「虹色のシンフォニー」は音楽科学生13名で結成されたプロジェクトです。宮城県内で音楽を学んでいる子どもたちをソリストとして招き演奏の機会を提供するとともに、演奏環境の充実をはかることを目的としています。2013年8月26日に震災復興記念館で開かれたコンサートには100名を超えるお客様が来場し、弦楽オーケストラにのせた子どもたちの音色に聞き入りました。音楽科の卒業生や一般の弦楽団体の協力も得て活動しています。



◆Heartful Sweets (ハートフルスイーツ)

「Heartful Sweets」では、宮城県立こども病院に入院する患者の家族のための宿泊施設（ دونالدマクドナルドハウス）にて、毎月1回手作りのお菓子を提供するボランティアを行っています。看病の合間にホッとできる時間を提供したいとの思いで、お菓子はアレルギーや季節感、嗜好を考慮し、手作りのカードとレシピを添えて提供しています。利用者の方からは「毎回美味しく、とても楽しみにしています」「思いがけないプレゼントに心が温かくなりました」と喜んでいただいています。かえって利用者の方から、励ましをいただくことも多い活動です。

◆しごと旅

「しごと旅」プロジェクトでは、体験型の職業ツアーの企画、運営、催行を行っています。子どもたちが本物の仕事と職場に触れ、「働くこと」について考えるきっかけを提供したいとの思いで発足しました。2013年度は、ネイルサロン、農家レストラン、ペットショップ、新聞社でツアーを催行しました。体験場所となる職場の選定から、企画書を携えての実施交渉、子ども集めに当日のツアーコンダクターまで全て学生が行います。初めての経験ばかりで苦勞も多い活動ですが、参加した子どもたちの好奇心あふれる笑顔を見ることができるのが何よりの喜びです。



7. LACを卒業する私からのメッセージ

*誰かのためというだけでなく、自分自身を高めることにつながるのが、自主活動です

児童教育学科4年 引地りサ

私が宮城学院でのボランティア活動を始めたのは東日本大震災後からでした。主に「小学生のためのサマーカレッジ」「大原小学校学習支援ボランティア」に参加しています。震災によって失われてしまった子どもたちの日常を取り戻すお手伝いをしたいという思いで参加を決めました。ただ、震災直後の1年は全く活動に参加していませんでした。地元のボランティアセンターで活動をしていたことも理由の1つですが、今思えば、私自身震災によって失われてしまった日常を取り戻すのに必死だったからだと思います。実際名取市で被災し、暮らしていた故郷やそこに住む人々が苦しんでいる様子を目の当たりにし、自分のことに精一杯でした。友達を失った悲しみ、当たり前だと思っていたことがもう戻らないと気づいた喪失感と悲しみ、多くの気持ちに押しつぶされそうでした。

大学3年生になり初めて参加したのが「小学生のためのサマーカレッジ」でした。そこで記録班として参加し、子どもたちが私達のキャンパスで楽しく遊び、そして学ぶ姿を撮影するうちに、子どもたちの笑顔が私の中の明るい気持ちを取り戻してくれるのを感じました。

そして、大原小学校のボランティアに参加しました。子どもたちの中には家族や友人を失い、住んでいた家も失われてしまった子が多くいました。最初はそんな悲しみを抱えた子どもたちにどう関われば良いのか分かりませんでした。何度も訪れている今でも明確な答えは見つかっていません。しかし、子ども達はいつもうれしそうに笑顔で私たちを迎えてくれます。だから私はどんな時でも笑顔でいたいと思って活動しています。辛いことがあっても悲しいことがあっても、誰かの笑顔が力をくれるということを私自身の経験から感じていたから

です。

この2つの活動に参加し、もっと多くの人に活動を知ってほしいと思いJICE主催の「キズナ強化プロジェクト」や、住友商事ユースチャレンジ・プログラムの中間報告会に参加させていただきました。多くの人とボランティアの経験を共有する中で、自分に不足していることや協力し合うことの大切さを感じたり、一緒に頑張る仲間を見つけたり、何よりも私自身の気持ちが変わりました。

子どもたちの苦しみや悲しみは潜在化している、支援の在り方は難しくなっていきますが、この活動に参加することで、子どもが抱えている感情に寄り添えるようにもっと学びを深めたい、そう思うようになりました。



後輩のみなさんに伝えたいことは、今の活動は子どもたちや地域の人々のためだけではなく、自分自身を高めることにもつながるということです。今は目に見える成果が出なくても、望んでいた結果と違ったとしても、それは違う形で芽を見せることがあります。そして、住友商事ユースチャレンジ・プログラムの選考委員の方がおっしゃっていましたが、決して支援する側、される側と固定化してはいけなく、支援してあげるという態度ではいけないということです。何度も活動がニーズにマッチしているか見直し常に確認していく事が必要だと思います。自分一人でやれることには限りがありますが、同じプロジェクトに参加し共に協力し合う仲

間があることは大きな強みです。これこそが、私達大学生にできるボランティアの最も大切な基盤であると思います。

***ボランティア活動を通して、積極的に働きかけることや関係づくりの大切さを学びました**

2013年食品栄養学科卒 晴山莉恵(養護助教諭)

私は養護教諭を目指していたこともあり、在学中には、被災地や宮城学院学生寮の中学生への学習ボランティア、小学生のためのサマーカレッジ、ドナルドマクドナルドハウスでのお菓子作りボランティア(Heartful Sweets)等、多くのボランティアで様々な境遇の子供たちと関わる機会を得ました。特にドナルドマクドナルドハウスでのお菓子作りボランティアでは、自分たちでプロジェクトを立ち上げ、活動を行いました。現在でも引き続き活動が行われているようで嬉しく思います。

子供たちと関わることはとても楽しく、充実した時間を過ごすことができました。また活動を通して、こちらから積極的に働きかけることや関係づくりの大切さを学びました。私は引っ込み思案なところがあるので、始めは何を話そうか、どう関わっていけばよいか分からずに戸惑うことも多くありました。しかし、緊張や不安を感じているのは子供たちも同じだと気が付いてからは、あいさつから始め、何気ないことを話しながら関係づくりをしていくように心がけました。毎日行けるわけではないからこそ、関係づくりは大切だと気づきました。次に行ったときにまた一からということもありましたが、その場その場の限られた時間を大切にしているうちに、たまに来るからこそ話してくれる弱音や愚痴もありました。

私は現在、高等学校の養護助教諭として働いています。在学中のボランティアで関わったのは小・中学生ばかりでしたが、関係づくりに関してなんら変わりはありません。今でも自分から積極的に働きかけるようにし、信頼関係を築けるよう努力しています。ただ、ボランティアの立場と職として関わることの大きな違いは、指導をする立場になったということです。ボランティアの時は、子供たちの話を聞き、受け止めてあげることばかりに目が行っていましたが、働くようになってからは受け止めるだけではなく、どのようにしてそこから、より良い方向へ導くかが重要であることを実感しています。



今、ボランティアをしようか迷っている方もいると思います。迷っているならぜひ参加することをおすすめします。ボランティアを通じて様々な人と出会うことで、私自身、考え方や価値観に広がりを持ってました。機会はいくらでも転がっています。ぜひLACの活動に参加して充実した学生生活を送ってください。



宮城学院女子大学
リエゾン・アクション・センター

〒981-8557 宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
TEL: 022-279-1340 (直通) FAX: 022-279-4555